

第13回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成23年10月27日（木曜日）午後2時から午後3時半まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 石原都知事、猪瀬副知事
野村評議員、花柳評議員、平田評議員、福原評議員、森評議員
太下専門委員、菅野専門委員、後藤専門委員、長田専門委員、中村専門委員、
西巻専門委員、大和専門委員、吉本専門委員

4 議 事

芸術文化の推進体制について

5 報 告

- (1) 伝統芸能に関する検討状況について
- (2) 東京文化発信プロジェクトについて

6 発言要旨

○福原会長 それでは、第13回東京芸術文化評議会を開会いたします。

皆さん、お忙しい中をご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今日は、安藤評議員、杉本評議員、蜷川評議員、宮田評議員から欠席とのご連絡をいただいております。

それでは早速でございますが、まず事務局から本日の資料について説明いたします。

○関文化振興部長 お配りした資料についてご説明申し上げます。

資料1は、アーツカウンシルの設置に関する資料でございます。資料2は、伝統芸能検討部会における検討状況を取りまとめた資料でございます。資料3は、東京文化発信プロジェクト事業に対する評価を取りまとめた資料でございます。資料4は、東京クリエイティブ・ウィークに関する資料でございます。

以上でございます。

○福原会長 ありがとうございます。

今日の議事でございますが、お手元に配付いたしました議事次第のとおり、芸術文化の推進体制に関してご検討をいただいた後に、伝統芸能に関する検討状況と東京文化発信プロジェクトに関してそれぞれ報告がございます。

次第に沿って会議を進めてまいりたいと存じますが、まず芸術文化の推進体制として、かねがね話題になっておりましたアーツカウンシルの設置に関する審議をさせていただきます。アーツカウンシルにつきましてはこの評議会でも何回か皆様のご意見をいただいたところですが、もう一步実現に向けて動き出すことになっています。

まず事務局から説明をいたします。

○関文化振興部長

前回、具体化に向けて検討の指示がございましたアーツカウンシルにつきまして、平成24年度中に設置をする方向です。

名称は「アーツカウンシル東京」とし、東京都歴史文化財団内に設置いたします。

アーツカウンシルと評議会の関係ですが、評議会が政策形成を行い、その方針の提示を受けまして、アーツカウンシル東京が具体的な施策を実行するものでございます。

アーツカウンシル東京は、3点の実現を目指すものとしております。

まず1点目は、「専門家を活用した文化を創る新たな仕組み」でございます。専門家を常勤で配置することにより、将来性のある事業を選抜するなど事業の目利きをまず行います。また、例えば2年後にフェスティバルを行うという場合でも、開催準備ができるよう、画期的な複数年助成の検討も行います。

2点目は、「東京の文化を支え、持続させていく戦略」でございます。まず、世界に伍していくために戦略的な情報発信に取り組んでまいります。また、次世代につなぐ人材育成も重要な機能として組み込みます。ファンドにつきましては、経済情勢などを踏まえ、平成25年度以降の設置を目指してまいります。

3点目は、「文化と産業を融合させた映画・アニメ分野等の取組」でございます。映画分野で実績のある手法を活用し、アニメ分野でもアジアに開かれた人材育成事業を展開します。また、若手クリエイターなどの現場感覚を政策形成に取り入れるためのワーキンググループを新たに設置いたします。そのためにも、横串を刺した推進体制を都庁内に設置するものでございます。

○福原会長 ただいま事務局から説明をいたしましたが、文化都市政策検討部会から補足する事項があるかと存じますので、部会長の吉本さんをお願いいたします。

○吉本専門委員

4年半前にこの評議会ができ、それ以降、評議員の先生方を中心にご議論いただいたわけですが、実行組織がない状態でした。今回の提案は、評議会に実行組織をつくることに

より、諸外国のいわゆるアームズレングスの法則に基づくアーツカウンシルの姿に一步近づくものと考えております。評議会設立以降、東京文化発信プロジェクト等で事業の実績がかなり積み重なってきましたので、さらにそれを推進するためには今回のような組織強化が必要であると考えております。その上で、今回のアーツカウンシル東京の設置の意義は3つほどあると思っております。

1つ目が機動力、現場力です。我々の専門部会も月1回の会合ですので、評議員の先生方からご提案をいただいてもなかなかすぐに動けない状況がございますので、常時専門家が組織をつくることによって、より機動的な動きができるということが1点目です。

2つ目は継続性です。専門家を起用することにより、経験やノウハウ、ネットワークが蓄積され、それが継続されます。今、多くの事業はNPO等と協働で実施しておりますが、それらのパートナーシップがより実質的なものになると考えております。

3点目が専門性です。都立文化施設のほうでは、芸術監督、プロデューサー、学芸員等の専門家が配属されているわけですが、文化行政の専門官と言われる方は今なかなかいっしょにいない状況です。また、どうしても異動の問題があってノウハウが蓄積していかない。そこで専門家を起用することによって、専門性の高い組織がつくられるということがございます。

このアーツカウンシルの動きは、ご存じのように国のほうでも準備が進んでおりまして、宮田評議員が座長を務めてらっしゃる文化審議会文化政策部会で、芸術文化振興会が検討したものをさらに強化すべく検討が進んでおります。また、他の都道府県でもこういうものが必要だという意見が出ておりますので、ぜひ東京都がその先陣を切って推進する形でアーツカウンシル東京の設置を進めていただけたらと思います。ご議論をよろしく願いいたします。

○福原会長 ありがとうございます。

今のお話のように、諸外国はアーツカウンシルが芸術文化の振興を担うということが一般的になっていますが、日本ではまだどこもそうした仕組みになっていないわけです。

「アーツカウンシル東京」というタイトルがつけましたが、国や自治体を巻き込んでこの国の文化政策を動かす新たな原動力になる、あるいはほかの自治体のモデルになるようなものであるべきだと考えています。前回、小さくてもいいから機能するところから出発しようという方向づけをしたところですが、将来も見据えてより充実した制度としていくために、ただいまから皆さんのご意見をいただきたいと存じます。

なお、文化庁でもアーツカウンシルの設置を考えているわけですが、少し違っていて、文化庁のほうは、当面は評価の仕組みをどうしたらよいかを検討していきますが、東京都のほうは現場を持っていますので、まず出発し、経験を蓄積しようというところがあるわけです。先日、文化庁の会議の時に、私は、山の頂上は同じですが登り口が違うので、両方から登ってみて、あるところでお互いに比較検討しましょうと発言しております。

ということで、今までの報告につきまして皆様のご意見をいただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○石原知事 アーツカウンシルは、聞こえはよいのですがよく分からない。ほかの国でやっているということですが、例えばどの国でどのような人たちがどのようなことを行ってきたのですか。

○福原会長 では、吉本さん、お願いします。

○吉本専門委員 これは、国によって多少の違いがありますが……。

○石原知事 どのように違っているのか、たくさん教えてほしい。

○吉本専門委員 例えば一番歴史の長いのはイギリスで、60年以上の歴史があります。初代会長がケインズで、大戦後すぐにできました。それは政府から一定の距離を置いて執行権を持つ機関として設立されまして、主に芸術団体や文化施設に対する助成事業を行っていたわけです。

その後ずっと発展をしてきまして、今ではいくつかの機能があります。例えば助成金をどう分配するかということ、また、「パイロット事業」と呼ばれる新しい事業を試行的に実施し、それに効果があればさらに本格的なものにするということもあります。

○石原知事 パイロット事業とは具体的にどのようなことを行っているのか。

○吉本専門委員 イギリスの例では、「クリエイティブ・パートナーシップ」と呼ばれる、アーティストやクリエイターを学校に派遣して子供たちの教育を行うという事業が2002年に始まりました。パイロット事業として予算をつけて全国で試行的に行ったところ大変効果があったので本格的に導入しようという施策に具体化された例がございます。

○石原知事 学校に派遣してどのようなことを教えるのですか。

○吉本専門委員 いわゆるワークショップ形式で行うのですが、例えば演劇の専門家が行くと、お芝居をつくるという手法を使いながらコミュニケーション能力や、発想力などさまざまなクリエイティビティーを養います。

その成果が具体的に調査されていますが、一番の成果は子供たちの学習意欲が高まった

ということで、その結果、国語や算数、理科の成績まで高くなったというような成果が出ています。アーツカウンシルが主導して、恐らくそういう効果があるだろうと予測してパイロット事業を行ったわけですが、実際それが検証されて、より本格的に予算を導入して行うというようなことが起こっています。

アメリカでは、大体州政府レベルでアーツカウンシルがございまして、例えばニューヨーク州には、New York State Council on the Arts (NYSCA) という機関がございまして、アメリカの文化施設運営は日本とかなり異なり、例えばメトロポリタン劇場のような施設もNPOで運営されていますから、NYSCAの場合は助成事業が中心で、限られた予算をどう配分するのが一番効果的かということを考える機能を持っております。常に助成プログラムを見直しながら、予算配分を検討し、検証し、組み立てていくというような機能を持っております。

シンガポールのアーツカウンシルは、助成のほかにも文化事業を主体的に実施しております。例えば「シンガポール・アーツ・フェスティバル」というものがございまして、アーツカウンシルの主催で行っています。

○福原会長 先日、イギリスの文化大臣が来日した際に、ブリティッシュ・カウンシルの主催で懇談会が開かれました。そこで聞いたことですが、イギリスのパイロット事業では前衛的、先端的なことを行うということで、誰もあまり手がつけられないようなことをアーツカウンシル主導で行うということでした。

○吉本専門委員 恐らく、行政が税金を使って実験的な事業を行おうとすると、すぐに実行に踏み切れない面があると思います。そこは、一定の距離を置いた専門機関でまずトライアルとして実験的に行い、それで成果があれば具体的な施策にすることだと思えます。

○石原知事 東京は、ワンダーサイトなどでもそのようなことを既に試みているわけです。世界的な評価ができてきて、多くの方が東京のアーティスト・イン・レジデンスに行きたいというくらい評判がでています。それも、東京の場合、非常に前衛的なコンテンポラリー・アートです。ですから、一部では既に実験的な事業を行っているのです。そういうものをしっかり認識して評価してもらいたい。それから、ほかにいろいろなことを行っているでしょう。先ほどの学校へいろいろな人を派遣するという事業は、子供の感性を刺激するというものなんでしょうから。

天才的な数学者の岡潔さんは、有名な数学者が残した難問をあっという間に解いてしま

ったという。あの人は芭蕉が好きで、芭蕉の「奥の細道」の地に出かけて行って、芭蕉が俳句を詠んだところで観照して、それであつという間に半年で解いてしまった。そういう有機的な働きというのは、今の日本の教育の体制では啓発しません。そういうことをやってほしいですね。何のためになるか分からないけれども、実はそれが非常に大きな感性的な貯金になるというような、そういうプランも立ててください。外国に例があるなら、よいものはどんどんは真似したらよいと思う。

○福原会長 ありがとうございます。平田さん、何かおありですか。

○平田委員 アーツカウンシル自体につきましては、この評議会の前身の「東京都の文化施策を語る会」の時から、福原さんと一緒に悲願として提言してきたことが、ここまで来て本当によかったと思っております。国の文化芸術振興会は、英訳はアーツカウンシルですが、実質は全くそうなっていません。進めようとしても、官僚や天下りの人たちの非常に強い抵抗があります。要するに、これは官僚から専門家に実務を移すという方向で、今村さんが属人的に行っていたら、それをもう少し組織的に行って継続性を持たせようということなので、東京都でぜひ成功させていただいて、国の施策に反映するようなものにしてもらいたいと思っております。

○福原会長 野村先生、いかがですか。

○野村評議員 実演家の立場で言いますと、今ここに書かれている複数年での助成ということをご希望したい。

○福原会長 単年度でなくて。

○野村評議員 ええ。私、今年度、ワシントンの桜祭りに呼ばれて行くのですが、文化庁が今年度の予算ですから3月31日までに使うようにと。ですから、桜祭りですが4月の初頭には出られない。そのような不自由な制度です。

○石原知事 野村先生、日本の国の会計制度は基本的に間違っているのです。経済界も実はそれに気がついていないのです。単式簿記を使っているのは、日本のほかわずかな国だけで、ほかの国は発生主義の複式簿記を使っている。東京都は複式簿記にしましたから、都に関してはそういう不合理なことはしませんが、予算の執行でもまさに繰越しができないのです。本当にばかげた話で、端的に言うと、2月、3月の年度末になると道路工事が頻発するのと同じように、芸術の世界でもそういうことが起こることです。東京に関してはその心配はありません。

○福原会長 今の野村評議員のお話については、制度面では都は国に準じなければいけな

いのですが、運用の際には今のような問題を起こさないようにやっていくべきだろうと思います。

○野村評議員 ぜひ魅力ある検討をお願いしたいと思います。

○石原知事 皆さんはそれぞれの分野のオーソリティーなのだから、やはりこういう議論で、抽象論ではないことを取り上げたらどうか。花柳さんには舞踊のほうでこういうことを行ったらよいという提案をいただければ。日本の舞踊の面白さを出せるようなものがあるでしょうし。

それから、日本人はうなるというのがとても好きなのです。別に謡をやれということではないのですが、日本人独特のうなり方のようなものがあるでしょう。そういうものを伸ばしたいということと、それはまた何かほかの趣味に通じていくと思うので、具体的に提案してもらいたいのです。そうでないと、せっかく専門家が集まって話しても仕方がない。

○福原会長 花柳先生、いかがですか。

○花柳評議員 私たちの古典芸能の世界で言いますと、前回は申し上げましたが、流派という問題があって、これがなかなか難しい。これを解消するといった大それたことは考えていませんが、国立劇場にはいろいろな制度があるにもかかわらず、この古典芸能の世界の人間はあまり積極的に参加せず、みんな個人でやっているのです。しかし、個人ではたいしたことができません。

私は、やはり都がそういう養成機関のようなものを持つべきだと考えます。人材が大変不足しているし、とにかく舞台の芸というものは観客がいないと成り立たないのですが、その観客がなかなか集客できないのです。つまり、西洋文化がいろいろ入ってきている中で、この問題をどうするかということ。

この間も私、バレエと一緒にチャリティー公演を行い、バレエの中に私が入って一人日本舞踊で出たのですが、これには観客が非常にびっくりしていたそうです。ほとんどの観客が日本人のバレエファンなのですが、日本舞踊はやはり凄いということが評価されたのでしょうか、カーテンコールが非常に多くて10分ぐらい続きました。日本人の血というか、そういうものがあるのです。ですから、それを個人ではなくもう少し組織的に、都で積極的に行っていただければ、私のほうの協会も賛同して行えるのです。個人の考え方が非常に強いのですが、個人の力ではたいしたことができないと思います。

我々の協会はそれをしなくてはいけません、そういうものを発表して、つくったものを見ていただけるような場がないとやはりできないのです。個人の会は数多く開いており

ますが、それらはアマチュア程度のレベルです。ですから、ある意味で人材育成のための養成機関も必要だと思います。

○石原知事 花柳さんは昔からいろいろ奇天烈なことをされるので有名で、遂に花柳のトップになったことはうれしいのですが、あの世界では随分先輩から白い目で見られたことがあったでしょう。

○花柳評議員 はい、ありました。私も昔、都知事と一緒にいろいろお仕事をさせていただいて、日本舞踊なのですが現代物の洋服を着て踊ったり、洋楽で踊ったりしていましたが、それが今日につながっていると思います。ですから、若い人はもっと積極的にそういうことをやればよいと思うのですが、なかなかそういう場がないことと、経済的な問題もあるのだと思います。

○石原知事 文化というのはカクテルですから、混ぜ合うことで向上していくのです。武満さんが「ノヴェンバー・ステップス」をアメリカで初演した時に、皆がびっくりしたわけです。とにかく1つの楽章だけは琵琶と尺八の掛け合いでしょう。それは侍の切り合いみたいなもので、みんな息をのんで聞いたというのが、やはりあのようなことを違うジャンルの芸術でもどんどんやってみたいですね。バレエと日本舞踊と一緒に踊るとするのは凄く面白いと思う。

それから、流派というのは私は分からないのです。同じ道成寺を踊ると、我々からはどの流派も同じように見える。

○花柳評議員 大変難しい歴史があるものですから。ただ、それを一つの事業のように考えてどんどん家元ができてしまったのです。今は大分おさまってきたのですが、ある時期にたくさんできて、何千という流派が日本全国にあるそうです。何の規制もないので、自分から名乗り出れば明日からでも自分が家元になれるという世界です。

○福原会長 人材育成は、このアーツカウンシルを進めていくと当然必要になります。それから、進めていくことによってそれが人材育成になり、評価する目や、クリエーションを手伝えるような力が出てこなければいけないと私は考えています。

森評議員、いかがですか。

○森評議員 少し違う観点からですが、そのように日本独特の文化や芸術を育てていくことはもちろん中心になりますが、その発表の仕方として、今はユーストリームなど情報発信の方法がいろいろありますので、そういうものをもっと利用していくとよいと思います。東京の中、日本の中だけでやっているのではなくて、そういうものを世界から見に来るよ

うな形につくり上げたほうがよいと思います。

それには外国から見やすい形にするということで、日本語だけではなくタイトルだけでも英語を入れたり、少し参加できるように、世界の人がクリックできるような形にしたりすることがとても大事ではないかと考えております。

○福原会長 中には当然そういうこともあると思います。評議員の皆さんからご意見をいただきましたが、専門委員の方々からもご意見はありませんか。

○石原知事 具体的な案を出してください。行政が関与するのだから抽象的なことではだめなのです。

○猪瀬副知事 専門委員のほうから具体的なことをきちんとと言わないといけないと思う。アートというのは一番感度がいい世界なのですが、役所というのはその対極の位置にいて、新しいものをつくる時に根回しや会議の数がやたらに多くて遅いわけです。だから、それに予算をつけたりする時に時間がかかるが、その代わり、予算をつけたらきちんと実施する。感度が一番いいものとの距離感を埋めるのが今回のアーツカウンシルです。そういうことで、具体的な例を幾つか専門委員のほうで用意したほうがよい。

とにかく遅いというのが、新しいものを生み出していく時にいろいろな意味で壁になるものですから、一番の課題は時間を速くするということです。また、先ほどの複数年の問題のように、合理性が貫けていないわけです。アートのようなものは思った瞬間に始まるぐらいのスピードが必要なので、そういう時にアーツカウンシルが意味を持たなくてはいけない。

○西巻専門委員 アーツカウンシルが実現した暁に真っ先に取組んでいきたいと思われる課題の一つに、プロデューサーの育成が挙げられます。近年アジア各国では、優秀な若手プロデューサーの育成がキーを握ると着目し、育成に力をいれた結果、若いアート・プロデューサーを続々と輩出しはじめています。それに対して、もともと日本の社会は「出る杭は打たれる」という集団主義が根底にあるので、プロデューサーが育ちにくい土壌があります。それはアート界といえども変わりありません。東京がアジアのハブになるためにも、新しくできるアーツカウンシルで、若い有能なプロデューサーの卵たちに、責任とチャンスを持ってトライアルする場を提供し、それを通して磨かれ、あるいは淘汰され、真に国際的な力を持つプロデューサーが生まれていくような活動が一つ期待されます。

○石原知事 それは分かりますが、どうしたらプロデューサーをつくれるのか、君なら君の案がなければいけない。批判ではしようがないでしょう。

○西巻専門委員　そういう若い芽は今いろいろなところに少しずつ出かけています。アートNPOが生まれ定着していく中で、20代、30代、40代前半の感度のよい若手が羽ばたき始めています。しかし彼らの多くは、経済的な基盤が脆弱な中で活動しているのでなかなか長期的なビジョンで物事を考えていくことができません。そういう若者たちをきちんと評価・選抜して、彼らに数年という単位でプロジェクトを任せるようなチャンスを与えてってはどうか。

○森評議員　それに関してですが、今、六本木アートナイトの実行委員長をうちでお引き受けしておりますけれども、いつまでもそういう体制で行くべきではないと思っております。例えば、実行委員長やアートディレクターをアートカウンシルと一緒に毎年選んで実施していく。その時に若い人も加えて、また次の年もということを繰り返していくとプロデューサーを養成できると思います。

○吉本専門委員　もう1つ具体例を申し上げますと、事務局の報告にもありましたが、ファンドと呼ばれるものが検討されています。例えば福原会長が会長をされている企業メセナ協議会でもGBFundという復興のためのファンドをつくり、資金を集めて支援するというのを4月から始めております。そのことによって、メセナ協議会の担当の方が現地とやりとりをする中で、何が困っているのかということがつぶさに分かります。その情報に基づいた助成、支援をするというように、まさしく猪瀬副知事がおっしゃったような機動力や即効性のある体制ができてくると期待をしています。

○石原知事　これも抽象的な話になる。音楽に関して言うと、国際フォーラムの鳥海さんは「ラ・フォル・ジュルネ」を持ってきたのです。誰もやらないことだが、これは大成功だった。それまでゴールデンウィークは閑散としていた街が、数十万の人が出るので満員になるのです。そういうことをすでに東京はやっているのだから、抽象論ではなく具体的にこんなことをしようということを出してほしい。プロデューサーを育てたいなら、どういう世界でどういう事例でそういう芽がつかされたとか、嫌な話も多いだろうけれども、それは反省の素材になりますから教えてほしいのです。とにかく日本は人が育たない。この東京で何か新しいことをやろうという人間がどういうふうにつぶされたか、そういう事例があったらぜひ教えてもらいたい。そういう風土をまず淘汰していかなくてはいけない。

○森評議員　アートナイトですが、最初に始めたのはニューイ・ブランシュといってパリで

すけれども、私たちもアートナイトを始めて、一晩で80万人が集まる大変活気のあるものになっておりまして、続けていこうとしています。今年は10月にパリのニュー・ブランシュを3～4人で勉強に参りまして、いろいろ情報も集めました。ニュー・ブランシュはパリ市が中心になって行っているのです。ですから、パリ市が持っているいろいろな公園や空き地、建物をその日は自由に使えるように提供し、パリ市の12号線という地下鉄を昼夜動かすということもしておりますから、東京都さんがアーツカウンシルを中心に実施してくださる時には、そういうことも十分やっていただくとより成功するだろうと思っております。

先ほどの単年度予算はだめだというお話をいただいて大変心強いのですが、来年まではとにかく3月31日まで使わなくてはいけないという東京都さんの意向でしたので、私どもは4月のほうが暖かいからよかったです。3月30日ごろに開催することになりました。

○石原知事 それはゆゆしい話です。東京都の役人にそんなことを言う者がいるのですか。

○森評議員 ええ、その方針でずっと3年間実施しておりました。

○石原知事 そういうことを言った者は出てきなさい。

○森評議員 それが今度アーツカウンシルの中に入ることで、3年間ぐらいはまとめた予算になるというので、私どもも大変期待しております。

○福原会長 いろいろ皆さんからご意見をいただきましたが、知事と副知事から、もっと具体性を持たせて、議論しているだけではなくて実際に何をやるかをはっきりさせるようにというお話でした。これで取りかかって進行させていただきますと当然次は具体論になりますので、そこでまたご報告をし、皆様のご意見をいただくことになると思います。

アーツカウンシル東京がせっかく設置されるのであれば、有効に機能するように、ある意味では国と競争ということもありますので、こちらのほうがモデルになるような、しっかりとした体制を構築していくように引き続いて考えなければならないし、皆様のご意見を伺っていきたいと思っています。設置や運営が進んでまいりましたら、状況を随時皆さんにご報告をするように事務局をお願いいたします。

○猪瀬副知事 アーツカウンシル東京は、先ほど平田さんが、今村さんが属人的に行っている活動がある程度空間的に組織的に広げて制度化していく形をとることだと説明されましたが、その通りだと思います。しかし、今回の報告では規模感がよく分からない。それから、どのくらいのスピードを出せるかという時に、どのくらいの人たちでどういう決め方をするか、イメージがつかめない。今回はもう少し格好になるかと思ったのですが。

○福原会長 後で事務局から説明をお願いします。

○平田評議員 具体的なところは事務局からになると思いますが、私たちとしては、最終的には東京都の文化予算については全部ここで執行するようにすること、さらに、逆に政策提言をして、こういう予算を出してくださいということを言うようにするところまでが最終目的だと思っています。

一番大事なことはスタッフが常勤でいるということで、今は助成金を出す際には、評論家などを集めて、資料を見ながら1日で決めてもらっているのです。ですから、東京都としては継続した審査はしていないし、結果の追跡調査もほとんどしていない状態なのです。今のシステムではそれしかできないので、常に見ていて、頑張っているところには大きな予算をつけたり、成果を上げていない場合には助成を途中で取りやめたりすることが本来のアーツカウンシルの役割です。そこまで行けるかどうかというのは本当に事務方にかかっていると思います。

○福原会長 それでは、具体的な体制そのほかを事務局から。

○石原知事 少し待ってください。アーツカウンシルがこれからいろいろなプロジェクトを展開していく時に、そのための人材の評価はとても大事な問題だと思いますが、実は東京はもうやっているのです。東京にたくさんいる大道芸人の資格認定をしっかりと行っているのです。歩行者天国でも芸を行えるように、芸能の分かる人が査定をして、資格を与えていまして、今は大変数が増えています。

ですから、何かを行う時にどういう人材を使うか、その評価はとても大事だと思います。評価する人間そのものの評価のようなものが必要になってくるかもしれませんが、既に東京が評価を行っている事例があるということを皆さんにご認識いただきたい。

○平田評議員 この評議員が、評価する人間を評価する形になります。

○福原会長 事務局からお願いします。

○関文化振興部長 現在、予算、人員の体制はまだ正確には決まっておりませんが、今のところ、平田評議員にもおっしゃっていただいたように、4から5名のプログラムディレクター、プログラムオフィサーを配置したいと考えております。それから予算の規模については、既存の文化発信プロジェクトなども含めまして、15から20億円程度の規模で事業を立ち上げたいと考えております。

○福原会長 というわけで、これから先は具体的な提案をさせていただきたいと存じます。よろしくをお願いします。

次に、報告でございますが、伝統芸能に関する検討状況についてです。伝統芸能検討部会から、伝統芸能の継承・発展、発信について報告をいたします。

本日は部会長の草加さんがご欠席ですので、横浜市の能楽堂でさまざまな公演をプロデュースしていらっしゃる中村さんから報告をしていただきますので、よろしくお願ひします。

○中村専門委員 では、草加さんにかわりまして私のほうからご説明させていただきます。スライドのほうをごらんいただきます。

まず検討の前に、現状認識として古典芸能がどのような状態にあるかということを図にしております。魅力的な公演の減少、実演家の減少、稽古・発表の場の減少、それから観客離れ、これが全体的に負のスパイラルという形を招いて今の状況になっているということでございます。これを前提にお話をさせていただきたいと思ひます。

都が実施すべき施策の方向性につきましては、国とのすみ分けをどのような形にするか、あるいは国と屋上屋になるような重複する施策ではなく、東京としてオリジナリティある施策を展開していく必要がございます。一口で申し上げますと、国の施策は無形文化財の保護としての伝統芸能の継承、あるいは保存、発展という形が中心になっています。

それに対して、都はどのような形の施策に主に取り組めばよいかということでございますが、現代に生きる文化としての古典芸能ということをお願いいたします。一つの方向性として、観客離れに歯止めをかける視点からの新たな取組を展開すべきではないかと考えております。

○石原知事 「新た」というのはどういうことなのか、具体的に言ってください。

○中村専門委員 これから申し上げたいと思ひます。施策の方向性といたしましては、観客を呼び起こすための新たな取組という形で2点問題点がございます。1点は「日本の伝統を、保持し普及していくための基盤づくり」。これは負のスパイラルの整理のところでもございましたけれども、歴史的に日本の伝統芸能を支えていく社会的な基盤、教育的な基盤が崩壊しているということ。もう1つは「伝統芸能の新たな魅力の創造・発信」。この2つを大きく方向性として掲げております。

1番の「日本の伝統を、保持し普及していくための基盤づくり」の具体的などころでございますけれども、既存事業といたしましては、芸団協さんが中心になっております「キッズ伝統芸能体験」など、小・中学生を対象とした体験型の事業が行われております。足りない部分といたしましては、その上の高校生、大学生、あるいは国際学部などの学生と

出ておりますけれども、海外に行く可能性が非常に高い若者たち、それは社会人も含めてですけれども、そういう人たちが真の国際人としての資質である自国の伝統文化というものを理解しているように取組を行ってまいりたいと思っております。

2番の「伝統芸能の新たな魅力の創造・発信」といたしましては、既存事業として「東京発・伝統WA感動」などのフェスティバルが開催されております。さらなるものとしたしましては、観光資源としてどのように伝統芸能を活かすかが課題となります。あるいは、先ほども議論に出ておりましたけれども、さまざまな分野を超えたジャンルとのコラボレーション、それから、単に伝統芸能を振興するというのではなくて、それを「江戸・東京ブランド」の資源として活かすための海外プロモーションの取組を掲げております。

最終的にそれらの機能を展開する「場」の検討です。これは、単にホールや施設をつくるということだけではなくてネットワークをつくるということです。拠点をそれぞれ形成する中で複数の拠点を設ける。あるいはランドマーク的な伝統文化の発信拠点を形成する。それぞれいろいろな形のもので考えられると思います。

以上を評議員の皆様にご了解いただいた上、具体策に進めてまいりたいと考えております。以上でございます。

○福原会長 ただいま中村専門委員の報告がありましたが、ご意見をいただきたいと思っております。

○花柳評議員 これは実際にすぐに始めたほうがよいと思います。具体的に言いますと、時々とか定期的にやるというのではなくて、常時そこに行けば見られるというような場が欲しいと思います。そのための劇場をつくるとなると大変なことですが、今挙がっている幾つかの劇場に行けば常時日本の古典芸能が見られるとよい。それは観光産業ともつながってくると思いますが、一般人、外国人観光客も含めて、なるべく多くの人を集めるということを考えたほうがよいと思います。そこに出演するための養成機関を設置、あるいはオーディションの形で出演者を厳選して、そこで1年や2年という契約をして、出演させる。とにかくまず舞台で実演するというのが私としては先だと思っております。

○福原会長 ありがとうございます。中村さん、いかがですか。

○中村専門委員 全体の方向性としたしましては、従来型の伝統芸能を保存・継承ということではなくて、資源として東京がそれをどう活かしていくかということが議論になっております。ただ、具体策に関しましては、今日の皆様のご了解をいただいた上で進めたいと思っております。

○石原知事 今の報告の内容も抽象的だ。これは野村先生か花柳先生にお聞きしたいのですが、例えば謡にしろ、長唄、小唄、都々逸にしろ、日本独特の発声法があるわけですね。これはやってみると案外エクスタシーがあるのです。私も一時謡を始めたら、必ずその先生が「高砂」をやるのです。そうではなくて、私がやりたいのは、信長の「敦盛」なのです。「それはちょっと、あそこはかなり上ですから」「いや、いいんだ、私はそこだけで」と言うと、「それは定石じゃございません」と。

私の知人が「ついに泣かぬ弁慶も一期の涙ぞ殊勝なる」だけ覚えていて、うまいのです。たいしたものだとみんな感心しますが、それだけなのです。私もそれでよいと思うのです。それで少し日本流の発声のエクスタジーを味わうともっと踏み込んでいくようになる。

どうも定石ばかりで、とにかくいろはにほへとから習わせるというのは損なのではないですか。若い人ならともかく、いい年になった人間が少し趣味でやりたいと思う時に、さびのところだけ最初にやらせてあげればよい。それは専門家から聞いたら聞いていられない下手なものでも、当人が気持ちよければそれでよいのではないですか。だんだん深みにはまっていくようなことをしたらいい。そういうノウハウというのはないでしょうか。

○野村評議員 今実施していますキッズ芸能体験のようなものも、前にも知事がおっしゃっていたように、子供たちがもっと健康で明るくて力強い声が出るようにやるのが大切で、何の曲をやったということではないと思います。ただ、少し保守的に言うと、歴史的には、子供たちと1対1で訓練していくということが本来は大前提です。たくさん集めておいて一度に何かをさせるということは基本的にはないわけです。しかし、それだと普及の上での広がりには欠けてしまいます。

資料2にあります「今後の取組例」に、高校生なり大学生を教育的にとありますが、あまり教養的にならないようにしないと危ないと思います。ただ、私の体験で申し上げますと、例えば司法研修所の生徒が世の中に出ていく時に何らか伝統芸能のようなものに触れ、外交官も当然そういうものに触れるというように、大学生などもう一つ上のランクの人たちにアプローチする企画は、この「キッズ伝統芸能体験」の次のプロセスとしてぜひ部会で進めていただきたいと思います。

○福原会長 大変有益なご提言だと思います。

○中村専門委員 今、野村評議員のほうからありましたが、従来、東京に限らず、全国的に教育的な普及として多いのは小・中学生をターゲットとしたものです。そこで、部会の議論の中で、やはり海外に行く可能性のある外交官ですとか、一般的に言うと商社の社員

ですとか、あるいは国際関係の学部の学生、日本の伝統文化を専攻している学生、そういう人たちにも広く教育の場を設ける必要があるのではないかという意見が出ておりますので、できるだけ具体化した形で出していきたいと思っております。

○福原会長 ほかにいかがですか。どうぞ後藤先生。

○後藤専門委員 専門委員の後藤と申します。

私は大学の教員ですので、大学生対象の企画について申し上げたいと思います。観客層を広げるということであれば、もともと日本の伝統芸能はエンターテインメントで、遊び、あるいは楽しみとして広がっていたと思いますので、教育という枠ではなく、都市の中の楽しみの仕掛けに発想を変えて、もっと楽しんでもらえるものがよいと思います。もちろんプロの方はしっかりとした訓練はしなければいけないのですが、見るほうにとっては都市の中の遊びの仕掛けのようなものとして考えられないかと思えます。

と申しますのも、先週の金曜日、私の学会で日本橋の再開発を三井不動産が手がけているのを見せていただきましたが、日本橋界限を、東京都の都市整備局さんなどと一緒に伝統と文化の雰囲気をつくり直したいとおっしゃっているわけです。そういう都市整備局さんなどとも連携しながら、遊びの場として伝統芸能の場をもう一度掘り起こしていくという仕掛けがよいのではないかと思います。

○福原会長 ありがとうございます。今、学会とおっしゃったのは文化経済学会です。後藤先生が会長をされています。

○中村専門委員 今、後藤先生がおっしゃったような提案もやはり部会で出ております。伝統文化というものが日本の和の空間、遊びの空間も含めた形で育まれたということがございますので、単に伝統文化だけの振興ではなく、日本の空間を再生した形で、楽しみの中にどう日本の伝統文化を置けるかということになります。かつてそういう状況があったわけですが、残念ながら、やはり社会的基盤の崩壊のせいで、特に関東のほうはその辺が非常に難しくなっておりますので、その辺をどういう形で都市整備と結びつけながら展開していくかというのは私どもの議論で出たところがございます。ありがとうございます。

○石原知事 もっと面白さが必要だ。野村先生、謡でも長唄でも、さわりのところだけ、とにかく商品にして売ってください。

○野村評議員 おっしゃるとおりです。

○石原知事 そうすると、だんだん深みにはまっていますが、最初から「高砂」では、

とてもではないけれども続けられない。

○野村評議員 伝統の悪い癖で、どうしても「厳しいぞ、難しいぞ」ということのほうが先に来て、「面白いよ、楽しいよ」というところに行くのは、それを超えた先だという発想なのです。おっしゃるように、もっと早く「面白いよ、楽しいよ」ということを前面に出して法を説いていくことにならないとだめだと思います。

○石原知事 昔は芝居は今よりももう少しポピュラーだったのかもしれませんが、歌舞伎の名せりふなども父親たちの話を聞いていると出てくるわけです。子供はそれを真似して「悪い野郎は河内山」とか、中学生、高校生でも幾つかそういう話が真似をして出てくる。それで歌舞伎に対してどのような芝居なのかという興味が出てくるのですが、最初から難しいものや、てにをはだと言われたら、やはりのめり込んでいかないでしょう。

○野村評議員 昔の歌舞伎の声色などは歌舞伎をもっと普及させていく一つの知恵だったのでしょうか。

○福原会長 いろいろご意見をいただきました。平田さん、どうぞ。

○平田評議員 知事のおっしゃるとおりで、さわりを羽田やスカイツリー周辺で少しできるような施設があるとよい。観光は今では参加体験が伴わないと伸びないということが統計でも出ています。私はやはり羽田空港だと思うのですが、韓国はそれを行っています。民族衣装を着て写真を撮ったり、キムチをつくったりといったことを仁川も金浦も空港の中でできるのです。羽田とスカイツリー周辺にぜひそういう場所を設けていくべきです。

それから、東京駅周辺の場合は慶應丸の内シティキャンパスが行っていますから、そこと組むという方法は十分あると思いますが、乗り継ぎの1時間、2時間でさわりが体験できるものぐらいまで落とし込んで実施していただくことが必要です。その場合にやはり「伝統」が邪魔をするかもしれません。科学技術の場合には今、科学技術コミュニケーターという子供たちに教える専門家がいるのですが、伝統芸能も今後そこまで考えて、媒介になる人たちを養成していく必要があるのではないかと思います。

○福原会長 今日は、知事、副知事から、具体的な方向が大事だというご叱責をいただいたのですが、皆様のご意見は大変具体的なことが盛り込まれておりましたので、これを含めて今後伝統芸能検討部会でさらにブラッシュアップしていただきまして、引き続きさらに具体的な内容に詰めていただきたいと思います。と思っています。

(石原知事退出)

○福原会長 知事は退席されますが、続きまして報告の2です。

東京文化発信プロジェクトを前回ご案内しましたが、その後、どのような事業評価がされているか、事務局から説明していただきます。

○関文化振興部長 平成22年度に実施いたしました東京文化発信プロジェクト事業に関する評価がまとまりましたので、ご報告をいたします。

東京文化発信プロジェクトは、世界の主要都市と競い合える芸術文化の創造発信を目指すフェスティバル事業、芸術文化を通じた子供たちの育成を目指す子供・青少年事業、東京における多様な地域の文化拠点の形成を目指す東京アートポイント計画の3つの分野で19の事業を展開いたしました。

分野ごとに見てまいりますと、まずフェスティバル事業でございますが、「フェスティバル/トーキョー」や「恵比寿映像祭」が、国内外でアート・フェスティバルとして認知されたことが挙げられます。

また、「キッズ伝統芸能体験」などの子供・青少年事業につきましては、本格的な体験プログラムとして高い評価を受けたことが挙げられます。

アートポイント計画につきましては、地域的な広がりや戦略的な取組が実現したということが成果として挙げられております。

次に、プロジェクト事業全体としての評価についてであります。海外に向けた発信力の不足が指摘されておまして、こうしたことも踏まえまして、次の3点が今後の取組として挙げられております。

1点目として、事業開始から3年を経過したことから、個々のプログラムについて見直しを図りつつ全体の再構築を図るなど、さらに効果的な事業展開を図ること。2点目として、イベントを例えば春や秋に集中的に実施するなど注目度を高める工夫を図ること。3点目として、国際招聘プログラムの開催など国際ネットワークの強化を図ることの3点でございます。

分野別に見てまいりますと、フェスティバル分野につきましては、伝統芸能、音楽事業につきまして、これまで以上に創造性の高い発信力のある事業展開を目指したプログラムへの再編が取り組むべき点として挙げられております。

次に、子供・青少年事業につきましては、子供たちの創造体験の機会を増やす方策や普及拡大等の検討を行うべきとされております。

アートポイント計画につきましては、地域の活動を支えるコアとなる人材育成に重点を置きながら、共催団体の主体的な運営を支援することなどについて今後取り組んでいく必

要があるとされております。

以上、これまでの評価につきましては、24年度に実施いたします文化発信プロジェクト事業の実施に反映をしていく予定でございます。

説明は以上でございます。

○福原会長 ありがとうございます。今のご説明のとおり、都内ではかなり質的にまとまってきたと思っておりましたが、海外への発信力はやはりまだ不足であるということが課題になっております。この課題には対応していかなければなりませんけれども、既にその取組を始めていると聞いております。それから、事業評価にも関連がございますので、新たな取組である「東京クリエイティブ・ウィーク」について、東京都歴史文化財団のエグゼクティブアドバイザーであります加藤さんに説明をしていただくようにいたします。加藤さん、よろしく申し上げます。

○加藤エグゼクティブアドバイザー では、ご報告を申し上げます。

「東京クリエイティブ・ウィーク」は実はもう始まっておりまして、10月20日から30日まで行っております。これを開催している理由としては、当評議会において、事業を一定期間に集中してはどうかという意見がありましたことと、震災後の日本、あるいは東京のブランドが大きなダメージを受けている状況を克服し、我々の新しい文化の取組の現状、意気込みを世界に正しく伝えたいということがありました。

現在、東京都は「世界的な文化創造都市・東京」の実現を目指しているわけですから、これを目指して事業展開を図っているところです。事業展開の内容としては、東京文化発信プロジェクトを集中実施いたします。特に、国際招聘プログラムと国際会議を実施し、今日から3日間国際会議を実施いたします。明日と明後日には一般公開いたします。それから、都立文化施設との連携も図ってまいります。東京文化発信プロジェクトの集中実施としては、今ご紹介した幾つかのプログラムを含め、38のプログラムを集中的に実施してまいります。

今年度の特色として、国際招聘プログラム、国際会議を開催するわけですが、芸術文化関係者を海外から十数名現在招聘しております。ここには、先ほどから話題になっている若いプロデューサー、キュレーター、アーティスト等が含まれています。震災後の文化の力について改めて考え、新しい社会のあり方や未来を模索するために、国際交流基金のご協力を得て共催をし、国際会議を開催しているところでございます。また、都立の文化施設との連携では、多くの文化施設にご協力いただいて、開館時間の延長や特別のイベント

の実施をしていただいているところでございます。

東京文化発信プロジェクトは、先ほどあった3つの事業を展開しているわけですが、さらに今後我々が具体的に取り組んでいかななくてはならない点として、新たに3つの重要な施策を、ご報告申し上げておきたいと思っております。知事がいらっしゃらないのが非常に残念ですので、後でぜひお伝えいただきたいと思っております。

1つは隅田川をめぐるプロジェクトでございまして、既に東京都が隅田川ルネサンスに取り組んでらっしゃいます。そのほかにも、藝大と台東区、墨田区が合同したG T Sというようなプログラムがございまして、これらがそれぞれ別個に開催をされているわけですが、こうした動きを合流させて、江戸東京博物館の竹内館長がおっしゃっているように、隅田川を江戸・東京の大通りにしていくというような流れで連携プロジェクトを立ち上げていくことができないかと考えております。

次に、先ほどから課題になっております古典と新しい表現を結びつけたプロジェクトは、例えば、アジア全域に広げたような、およそすべての日本の古典を含む音楽祭のようなものが実施できないかと考えております。

3点目は、ヨーロッパでは毎年、文化首都というものを決めていくような構想がありますが、アジア文化首都構想のようなことをヨーロッパに倣って東京が中心になって開催できないかとも考えております。

これらは来年度以降の課題でございまして、実行できるところから随時実行していきたいと思っております。今年度についても、評議会でもいただいたいろいろなご提言は、既に年度が始まっておりまして今年度の事業に必ずしも十分に反映できておりませんが、我々なりに現在、事業の集中を含めた変更のできるプロジェクトを開催しているところでございます。

報告は以上でございまして。

○福原会長 以上のような報告をいただきましたが、東京文化発信プロジェクトについてお話がございましたら伺いたいと思っておりますが、いかがでしょうか。これもだんだん回を重ねてきたわけですが、今年は実際に始まっている段階です。今年これが終わりますと、去年より何が進んだとか、あるいは発信ができるようになったとか、ある程度の評価ができるわけですが、また来年のために、この時点でもっと気づくべき点についてご意見があればぜひ伺いたいと思っております。

○猪瀬副知事 この「東京クリエイティブ・ウィーク」のプログラムを見ながら思ったの

ですが、いろんなことをおやりになっていて面白いと思いますが、インターネット戦略が見えないのです。東京文化発信プロジェクトもそうなのですが、先ほど森さんから出たユーストリームのようなインターネット戦略が全然見えてこないのですが、その辺はどのようになっているのですか。

○加藤エグゼクティブアドバイザー 部分的には、幾つかのプロジェクトでユーストリームを含む展開を実施しておりますが、今、副知事のご指摘のとおり、ホームページのバイリンガル化、トリリンガル、さらなる多言語化というような面がまだまだ不十分な点は我々もよく認識しております。その点は、おっしゃられているような戦略として、今の段階でお答えできるほどの具体策がないので、ぜひ戦略は立てたいと思います。

○今村参与 会長、付け加えてよろしいですか。

○福原会長 どうぞ。

○今村参与 実は私も、ワンダーサイトで若手による国際的な事業を実施しているものですから、だいぶ前からユーチューブ、ツイッター、フェイスブック、新しいソーシャルネットワークのツールを使いたいと考えているのですが、実は事業をしている東京都歴史文化財団が基本的に認めておりません。しかし、猪瀬さんがツイッターを始められて、東京都がツイッターを始めたということが大きなブレイクスルーになると思います。

私も今年の4月からワンダーサイトでフェイスブックを使っているのですけれども、確かに非常に多くの反応があります。若い世代はやはりツイッターやフェイスブックを見て集まって来たのだと感じることがあります。

これは全体としてではないのですけれども、「フェスティバル/トーキョー」は、開催当初から、広報あるいはコミュニケーションツールとして、ツイッターやフェイスブックをメインに使っています。それが非常に有効に機能しているということは私も聞いていますし、実際私もツイッターを見ていて、「フェスティバル/トーキョー」に対するリツイートという反応が非常に多く起こっています。それはぜひ戦略として全体で行っていきべきだと思っています。

○福原会長 ありがとうございます。今のやりとりについては、現場で実施する担当をしていらっしゃる加藤さんのところで、この問題をどうするか、歴史文化財団はどうこれを解禁するか、あるいは、ホームページをつくったとして、最低バイリンガルにするにはどのような手間と費用がかかるのかというような具体的な問題について至急検討していただければと思うわけですが、いかがでしょう。

○加藤エグゼクティブアドバイザー 検討させていただきます。ありがとうございます。

○福原会長 ほかにご意見はおありでしょうか。平田さん、演劇関係はどうか。

○平田評議員 演劇関係では、毎回申し上げていることですが、「フェスティバル/トーキョー」は本当に成果が上がっていると思いますし、海外からとてもたくさんプロデューサーが来るようになりました。見本市的な性格も持つようになっていて、こんなに成功した例は珍しいのではないかと考えております。次の段階は、今評価の中でも指摘された国際性の問題ですが、これについてはぜひ副知事にも知っておいていただきたいことがあります。

要するに、日本の演出家とか、音楽家やダンサーもそうですが、いま一つ国際性が持てないのは、日本側に拠点を持ってないからなのです。ヨーロッパでは、演出家で40歳までに劇場の芸術監督や責任者になっていなければ、それは社会的適応能力がないと思われてしまう。子供扱いなのです。貴族社会の名残ですが、フェスティバルディレクターか芸術監督になり、お互いに呼ぶ、呼ばれるという関係になっています。ヨーロッパは全部そういうふうになっているのですが、日本側では演出家はただ演出をしているだけなので、全く対等なパートナーシップにならないわけです。

だから、できるだけそういう機会をつくっていただいて、例えば「フェスティバル/トーキョー」でも、1年ごとでもいいのでアソシエイトディレクターの制度をつくってキャリアを積めるようにする。ある一部を、例えば何かの会議のコーディネートをしたということでもよいのですが、そういうキャリアが国際社会においてはとても重要なのです。

指揮者でも大変優秀な指揮者がたくさんいる中で、常任指揮者や桂冠指揮者まではなれますが、音楽監督にはなかなかならないわけです。要するに、劇場運営を若いうちから学ばないとそれはできないのです。そういう機会をぜひ若手の演出家に与えて、一人でも二人でも国際競争力を持った演出家を育てるということをこれからは考えていく必要があるのではないかと考えております。

○福原会長 関部長さん、加藤さん、いかがでしょう。

○加藤エグゼクティブアドバイザー 日本では既存の文化施設が必ずしも創造機関になっていないということが非常に大きな問題だろうと考えております。ですので、既存の文化施設でディレクターを務めるということをもっと若いうちから経験できる仕組みをつくっていく必要があるというのはまさにご指摘のとおりで、全体のディレクター、それからアシスタントディレクターのようなポストで経験を積んでいただくということを含めて、

既存の文化施設そのもののあり方を抜本的に変えていくことによって解決できるのではないかと思います。東京には既にそうした施設があるわけですから、それらの新しい活用を考えて今のご指摘に対応していきたいと思います。ありがとうございます。

○福原会長 今の平田評議員のお話というのは日本全体のこととですが、ここで論議しているのは東京がどうするかということですので、できれば東京は日本全体のレベルから突出していきたいということで、事務局とともにその方向にしないではいけないと思います。

○猪瀬副知事 おっしゃることはよく分かります。マネジメントの意識があったほうがよいものをつくれるということですね。それはそうですが、日本の硬直したいろいろな組織形態の中で、具体的にアーツカウンシルがどういう形でそれをできるのかというアイデアをむしろ出していただきたいと思います。

○平田評議員 例えばアーツカウンシルができれば、大きな予算をつけて、若手の演出家に3年間多摩地区は任せるとか、伊豆七島で何かやってよいか、そのくらい大胆な責任と予算をつける。そのかわり、評価を継続して行うわけですから、3年とはいわず、1年でもだめならだめというような機動力がある。人を育てるにはそれしかないと思います。

○福原会長 ほかにおありですか。野村先生。

○野村評議員 もとへ戻るようなことながら、今の平田さんのご発言に力を得て申し上げますが、資料2の一番下の段にあります「伝統芸能の魅力を高める拠点としての『場』の検討」は、私が評議員にさせていただいてからずっと言い続けている事柄でございます。当然、都の文化施設との連携や、いろいろな建物の活用は大切なのですが、まずは都がしっかりとした核、拠点というものを持たなければ、その連携なり活用にはつながっていかないのではないかと。今日はいろいろお話が出ましたけれども、部会にはぜひ具体的な事柄に一步でも推し進めていただきたいと思います。

○福原会長 分かりました。関部長さん、何かご意見ありますか。

○関文化振興部長 現在、「場」をどのような形で具体化するかは伝統芸能検討部会でご検討いただいております。私たちのほうも、まず今回は方向性をいただきまして、具体的な政策につなげていきたいと考えておりますので、引き続き部会のほうで検討を進めていきたいと思っております。

○福原会長 花柳先生、いかがですか。

○花柳評議員 私も全く野村先生のご意見に賛同いたします。早く場をつくっていただきたいと思います。中身については我々サイドのほうで検討しなくてはいけないのですけれ

ども、そういうことができる場をつくることをご検討願いたいと思います。

○福原会長 森評議員さん、いかがですか。

○森評議員 おっしゃるとおりだと思います。古典の芸能のみならず、現代のものもその発信をする場というのがとても大事だと思いますので、アーツカウンシル東京ができれば、その辺に注力していただけるとよいと思います。

○福原会長 いろいろご意見をいただき、ありがとうございます。現在進行中のものをさらに高めていくために皆さんのご意見を頂戴したわけですから、今後の検討にこれも必ず付け加えるようにいたします。東京文化発信プロジェクトについては進めながらどんどん良くしていくように、あるいは充実するようにしておりますので、そのように事務局にお願いをすることになります。

あとわずかな時間がありますので、東京都の文化政策全般についてご意見があれば伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。専門委員の方々もご意見があれば、どうぞお願いします。

○吉本専門委員 アーツカウンシルのことに戻りたいのですが、知事から特に具体論を出せという課題を頂戴したわけですが、アーツカウンシルというのはある意味組織論であったり、推進の方法であったりするもので、アーツカウンシルができたからこんな事業をやり出すということは、部会での議論がなかなかそこまで行っていないのです。ですので、そこは引き続き議論をしたいと思いますが、アーツカウンシルができたから、次にこういう事業を始めるところまですぐに行かれるかどうか。これは事務局とよく相談をしなくてはいけないと思っていますが、その辺を今後部会でどのように議論を進めたらよいのかということについて、評議員の先生方から少しサジェスチョンをいただけたらと思います。

○福原会長 これは鶏が先か、卵が先かという議論でして、皆さんは今のように仕組みができていない時に具体論だけ出すということはどうかと思っていらっしゃる。それで、今は一つも具体論がないことになるわけですね。しかし、ここまで仕組みがある程度固まってきたところで、象徴的、シンボリックな具体論を少しお示しにならないと前に進まないと思います。

今までは多分、アーツカウンシルそのものが客観的に認められていないのにもかかわらず、シンボル事業を幾つか立ち上げてしまうのは走り過ぎではないかという心配もあったと思いますが、この段階では、アーツカウンシルをつくるということは認められているわけですから、遠慮なく象徴的な事業、あるいは実験的な事業を進めていただくように提案

していただいてよろしいのではないのでしょうか。

○今村参与 これは先ほど平田評議員からもお話がありましたが、アーツカウンシルの設置は、2005年に文化施策を語る会で、福原さん、平田さん、私も一緒に入らせていただいて議論をしていた時からの悲願だったと思います。逆に言えば、確かにアーツカウンシルの執行機関についての議論が、極端に言えば、いわゆる打ち出の小槌のように、アーツカウンシルさえあれば何とかなるというような議論があったかもしれないと私は思います。

先ほど加藤さんからご紹介があったクリエイティブ・ウィークの招聘プログラムで、現在ジャカルタのアーツカウンシルの元の委員長が東京に来ていまして、昨日話す機会がありました。結局、アーツカウンシルの役割というのは、単に行政の執行をおろしていく機関ではなく、英語で言うcivil society（市民社会）と呼ばれる社会的な市民たちと議論をしたり、吸い上げたり、逆にそれを普及していく、英語でadvocacy（提唱活動）と言われていることを行っていくことなのです。つまり、実は大変な量のコミュニケーションを行っていかねばいけぬ場所なのです。その点について我々がどのように考えているのか、彼から質問があったのです。

我々のアーツカウンシルの設計の中には、まだそれが重要なものとして組み込まれていない。協議型の政策決定など、市民と一緒に考えていく仕組みをつくっていかねばいけぬ。私自身の考えでは、アーツカウンシルは、単に助成金の配分や先鋭的な事業を行うだけではなく、新しい社会づくりのきっかけとなるような仕組みづくりを行うという意味で、日本の社会において先駆的なところとなっていく可能性すら持っていると思います。その辺の部分も織り込んで議論を進めていければよいと思います。

○福原会長 ありがとうございます。

先ほど協議型というお話がありましたが、対話型だとも言えます。一方に政策の大きな方向があって、一方にそれを実現していくクリエイターたちがいて、対話によって現在の社会情勢で一体どのように表現していくかということを決めることが、アーツカウンシルの一つの大きな機能だと私は思います。今皆さんからいただいたご意見をもとにして、さらに考え方を深めることができるのではないかと考えております。皆様にはご提言をありがとうございました。

そろそろ時間になりますが、皆様のご意見は、この会議の場だけでなく、随時、メールやファクス、電話で事務局にいただいても結構でございますので、さらにお気づきのことがあればご提案いただければありがたいと思っております。それによって、今日も幾つか

ご紹介いたしましたように、各部会の専門家たちによって細かく具体的なことを検討しております。

ほかにご意見はおありでしょうか。どうぞ。

○平田評議員 アーツカウンシルは新しい政策であり、予算がつきます。知事がおっしゃるように、アーツカウンシルができてよかったこと、あるいはアーツカウンシルができたからこそやりやすくなった事業というのはやはり示していくべきだと思います。例えば、先ほど吉本さんにご説明いただいた芸術家の学校派遣も、アーツカウンシルに専門家を配置することができれば格段にやりやすくなると思います。ですから、そこは数値目標として、来年度は200校派遣するといったものはやはり必要だと思います。私は、アーツカウンシルは絶対に成功させなくてはいけないと思っているので、そのために、目に見える成果を大きく出していくべきだと思います。

○福原会長 貴重なご提言をありがとうございました。

○猪瀬副知事 最初に石原知事が「具体的に」と言っていたのは、やはりそういうところが欲しいということです。今、数値目標と言われましたが、深く考えてゆっくり行うものもあってよいですが、成果がはっきり見えて、何をやるのかよく分かるようなもの、すぐにできるものを見せていかないといけないと思います。

○福原会長 深く考えてゆっくり行っているつもりではないのですが、仕組みのほうがある程度目星がつかないと突出してしまうのではないかというおそれもあるわけです。

○吉本専門委員 部会の議論で具体的な案も出のですが、事務局としては、それをこの評議会に上げることは、ある程度裏づけがないと難しい部分があると思うのです。ですから私は、そのような状況を脱却するためにも、アーツカウンシルがある程度の裁量を持ち、機動力のある事業推進をできるような体制が必要だと感じています。

○猪瀬副知事 先ほどの鶏が先か、卵が先かというお話のとおり、それはそうなのですが、サンプルの強みのようなものを出さないとやはり分かりにくいのです。それはともかく、アーツカウンシルを設置するところまで来ているわけですから、もう少し具体論も一緒に進めていったほうがよいと思います。

○福原会長 ありがとうございました。

先ほどから鶏が先か、卵が先かということを申していますが、卵を使うとこんなおいしい料理ができるよということが大事だと思っています。それでまたそれを成功させることによって、鶏が卵を生んでよかったということにならないといけないと思いま

すので、皆様、またご協力、あるいはお知恵をいただきますようお願いいたします。

これをもちまして、第13回東京芸術文化評議会を閉会させていただきます。

以上